

記録された 日本美術史

相見香雨
あいみ こうう

田中一松
たなか いちまつ

土居次義
どい つぎよし

の
調査ノート
展



2018年 6月25日 | 月 | ~ 8月11日 | 土・祝 |

一挙大公開!

- 開館時間 10~17時 (入館は16時30分まで)
- 休館日 日曜日、祝日 (ただし8月11日〔土・祝〕は開館いたします)
- 入館料 無料
- 会場 京都工芸繊維大学美術工芸資料館1階

- 主催 京都工芸繊維大学美術工芸資料館・実践女子大学香雪記念資料館
- 後援 美術史学会
- 協力 京都・大学ミュージアム連携

関西から



京都・大学ミュージアム連携
University Museum Association of Kyoto

京都工芸繊維大学
美術工芸資料館
MUSEUM AND ARCHIVES

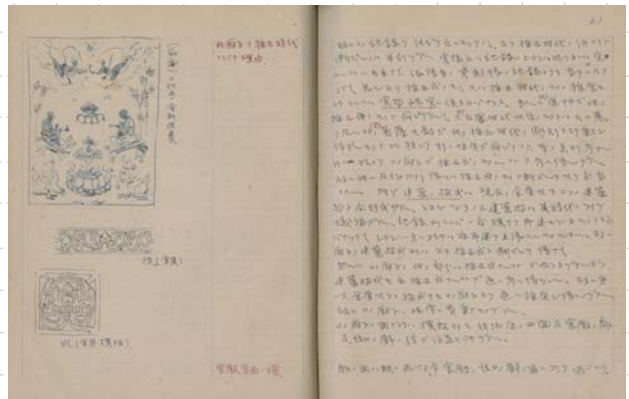
相見香雨

作品の調査と記録は、いつの時代も美術史研究の出発点です。日本における美術史学が草創期から形成期に入った大正・昭和期、幅広く数多く調査を続けた、相見香雨（1874～1970）田中一松（1895～1983）土居次義（1906～91）。三人の研究者の調査ノートには、三者三様の流儀で作品の記録が連ねられています。当時は、撮影や複写が容易でないことに加え、社会情勢の変化によるコレクションの散逸や、災害や戦争による文化財の破損など、作品をめぐる状況が揺れ動き、目の前の作品の記録をとる行為の切実さは一際強いものでした。三者の記録を通して、美術史学の歩みを回顧すると同時に、調査ノートにとどめられた研究者の目の記憶を再現します。



島根県松江市出身。新聞編集者を経て明治41年より審美書院で美術書編纂に従事。琳派・文人画・画譜等を中心に日本絵画史論考を多数発表。在野の立場で優れた実証的研究を続け、78歳で文化財保護委員に就任。

田中一松



山形県鶴岡市出身。第二次世界大戦中を含む半世紀以上、文化財保護行政の中枢を担っていた。全国の所蔵者のもと膨大な点数の絵画作品を実査。研究対象は、水墨画、大和絵をはじめ、仏画、宋元画、琳派と広範囲に及ぶ。内容豊富で克明なその調査記録は「昭和の古画備考」と呼ばれる。

土居次義



大阪市出身。学生時代から京都を中心とする寺院の障壁画調査に携わる。岩の皴法など細部の比較によって画家を判別し、筆者を特定する手法をとった。狩野山楽、長谷川等伯に関する研究を筆頭に、近世の諸画家について多数の論考を発表。



上：相見香雨自筆調査録より「大正十三年二月／三十」（表紙裏、『審美美術品目録』調査先）、右下：田中一松資料より『玉虫男子（東京帝国大学の講義ノート『濛精一氏述日本絵画史（推古白鳳天平三時代）大正九年度講義』））、左下：土居次義調査研究ノートより『法然院屏風調査（昭和九年）』

【関連イベント】

シンポジウム「記録された日本美術史」
 日時：7月7日（土）13:30～（13:00 開場）
 場所：京都工芸繊維大学 60周年記念館 2階
 定員：100名（事前申し込み不要）
 第一部：報告
 江村知子（東京文化財研究所文化財アーカイブズ研究室長）
 村角紀子（松江市歴史まちづくり部史料編纂課専門調査員）
 多田羅多起子（京都造形芸術大学非常勤講師）
 第二部：パネルディスカッション
 並木誠士（京都工芸繊維大学教授）
 仲町啓子（実践女子大学教授）
 奥平俊六（大阪大学名誉教授）
 山下善也（九州国立博物館主任研究員）
 五十嵐公一（大阪芸術大学教授）

※本展覧会の準備にあたっては、公益財団法人 出光文化福祉財団より、平成29年度調査・研究事業助成を受けました。

【アクセス】

●JR 京都駅より
 市営地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗車（約18分）「松ヶ崎駅」下車、徒歩約8分（「松ヶ崎駅」の「出口1」から右（東）へ約400m、四つ目の信号を右（南）へ約180m）
 ●京阪「出町柳」駅5番出口から京都バス「大原」行、「若倉実相院」行、「若倉村松」行に乗車、「高野泉町」下車、橋を渡り左へ約200m（徒歩約8分）

【ウェブサイト】

<http://www.museum.kit.ac.jp/>



京都工芸繊維大学美術工芸資料館
 Museum and Archives, Kyoto Institute of Technology

〒606-8585 京都府京都市左京区松ヶ崎橋上町
 TEL 075-724-7924 FAX 075-724-7920

【同時開催】華やかなフランス・ポスター ベル・エポックを中心に 2018年6月25日～8月11日